造形作家 竹谷隆之さん

日本列島の北・北海道積丹半島の先端に位置する町「積丹町」。この小さな漁村の出身者に国内外から熱い視線を集める人物がいる。7月、世界的造形作家として第一線で活躍する竹谷隆之さんに、東京都内の同氏のアトリエでお話を伺った。

―生い立ちを教えてください。

積丹町には美国中学校卒業まで住んでいました。当時から家で一人でいるときは家で絵を書いたり、プラモデルを作ったりして遊んでいましたが、やっぱり外で友達と遊ぶのがメインでした。夏は海で遊んだり、冬はソリやスキーで遊んだり、雪で何か作ったり。本当に良いところで育ったと思っています。そういった経験は今でも宝物です。

高校は札幌の高校に進学して美術部に入部しました。高校卒業後は美術の方面に進みたいと考えていたんですが、道内では美術を学べる大学があまりなかった。あったにはあったが、学科試験があり、高校時代に遊んでいて勉強しなかったので無理だろうと思い、学校の美術部の先生に相談に行ったら東京の専門学校を紹介してくれました。当時、東京は行きたいと思わなかったんですが、試験を受けに行ったら面白そうに感じたので、あとは流されるように…。

専門学校は立体を専門的に学ぶ学校ではありませんでしたが、デッサンやグラフィックデザインを勉強できたのでそれが今に生きていると思います。しかし知識や技術を得たことよりも、そこで一緒にやっていた仲間や友達が出来たことが一番良かった。やはり美術を好きでやっている人たちが集まっているので。

―そこは東京の大きな学校の利点ですね。

いや、それが学校自体は全く大きくなかったんです。1学年60人位でしたね、しかも卒業するときは半分くらいになっていました。課題を提出できなかったら進級できなかったので、そういった意味では厳しかったですね。今は少子化の影響を受けて変わりつつあるようですが。

―造形を志したのは？

僕はそれまでデッサンはほとんどしたことがなかったのですが、美術の学校に来るとやっぱり超絶に絵が上手い人もいたり様々な才能を持った人がたくさんいるんですよ。今考えると、よくやる気を無くさなかったなーと思うんですが（笑）、僕が趣味で作ったものなんかを友人たちが面白がってくれて「作れ作れ」と言ってうまくおだてて乗せてくれたりしたんですね。それまでプラモデルの改造くらいしかやったことがなかったんですが、その時期どんどんと上

【PROFILE】たけや・たかゆきさん
昭和38年美国町出身。造形作家。美国中学校卒業まで町内に在住。卓越した造形力と、独自の解釈で描かれるデザイン力が高く評価されている。1985年頃からフリーとして活動。積丹町を題材としたオリジナル作品『漁師の角度』（完全増補改訂版）を2013年に講談社より発売。現在も、映画、ゲーム、フィギュアなど様々な領域においてキャラクターデザイン、アレンジ、造形を行い、海外にも熱狂的なファンを持っている。
（竹谷隆之公式webサイト http://www.takeya.jpn.com/）
TAKEYA, 竹谷隆之／製作の現場から

達していったのはその「褒めのばし」のせいだと思います(笑)。そうして作ったものを模型店に置いといてもらったらそれを見た人から仕事をもらうようになったり…。そんな連鎖があって、造形の仕事をくれる人がいたから経験値も積めたし、できることの幅も広がったんだと思います。

―造形を仕事として軌道に乗せようとしていた訳ではなかったんですか?

そうですね…成り行きに身を任せて…というか、なーんにも考えてなかったんでしょうねー若い時は。たまたま周りに仕事をくれたり、「いいね」って言ってくれる人がいたから自然に造形を「仕事」として自覚するようになったんだと思います。

▲アトリエではスタッフが黙々と作業を行う

専門学校卒業後はすぐに造形の仕事を始めたわけではなくて、それまでアルバイトしていた関係もあって模型雑誌の編集部に就職したんですが、それとは別に、学校の先輩に万博などの展示映像を作ってる人がいて、その撮影に使う宇宙船や怪物などの造形物を僕に発注してくれていたんですね。会社に行きながらそんなことしてたんで寝る時間無くてヘロヘロになるわけですよ。それでようやく腹をくくってフリーになって造形でやっていこう、となったんです。

―自然に仕事として軌道に乗っていくのが凄いですね…

珍しかったんじゃないですかねー個人で造形やってるヤツなんて…。造形美術の会社に依頼するとそれなりの予算が要りますが個人だと安上がりですからね。請け負える量は少ないですけど。あと、時代もあるんだと思います。バブル期でしたから。今の時代に同じ状況に置かれたら、おそらく違っていたでしょうね…。

―特に印象深いエピソードはありますか?

そうですねー、印象深いといえば美国での体験の方が強く印象に残ってますよ。漁師だった父は、冬になって海に出られなくなると山に猟に行くんですが、害獣指定されてる動物の駆除とはいえ、それらを僕の目の前でバンバン鉄砲で撃ちぬいたり、トラバサミにかかったタヌキを撲殺したりするんですから。今考えると衝撃体験の割には何故かすんなり日常として受け入れてたのが不思議ですね。

―積丹町へ帰省はされていますか?

ほぼ毎年帰省してますよ。両親に孫の顔を見せるという意味もありますが、写真を撮るのが好きなので帰る度に楽しんでます。

―現在の積丹町にどんな印象を感じますか?

毎年帰るから分かる変化もあるんですが…僕が子供の頃の風景とはだいぶ変わってきてはいますね…。知ってる家や馴染みのある建物が無くなって更地になってたりするのは、仕方のないことだとは理解してますが、やはり寂しいです。僕個人としては真新しい物よりも、サビた古い物や朽ちた物、自然の作用が入って経年変化した物の方が絶対に美しいと感じるのですが、やはりそこに人や動物が生きてそれを使ってる状態の方が、より魅力的だと思うんです。そういう写真を撮りたいです。

―積丹町の皆さんにメッセージをお願いします。

僕自身、積丹町に生まれ育ったという体験が奇跡的なことだと思うし、それ自体が宝物なんです。本やネットじゃなくてそこで見たり感じたことは物凄く貴重で本質的なことなんじゃないかな、と。

なので、特に子供が育つ環境としては素晴らしいと思います。都会では魚がどうやって獲られてどうやって捌かれるのかを観察するのは難しいですし、生き物が目の前で生まれたり死んだりすることを見る機会なんて限りなくゼロに近いんです。そういうことを知るのは生物としての義務のような気もするので、普段の生活の中にそれらが散りばめられているというのは、本当に貴重で価値があることなんだと思います。

故郷がそんな場所で、有り難いことだと思っています!

▲雑然としながらも機能美を感じる作業机

大変活躍されている方にお会いするということで緊張して臨んだ取材でしたが、ご多忙にも関わらず非常に丁寧な、そして、「積丹の人」らしい温かい語り口で取材に答えていただき、作品には技術だけでなく人柄も宿るのだと感じた取材でした。

今後も国内外で更なるご活躍をされる竹谷さんを町を挙げて応援しましょう!

＝取材・企画課 高橋野亜＝